

日本の現在と ロータリー

岸和田東 中井 義尚

日本のロータリーの会員数が一九九〇年代後半に比べて昨今は三〇近くも減少し、昨年未現在、八万八四三九人と報告されています。会員数の減少だけではなく、二〇世紀の社会と比べて、二一世紀は一五年を経ても、良い時代だと全く思えないと感じるのは私だけではないと思います。

年々、高齢化が進み、寝たきり老人が増加傾向にあります。この二点を考え、健康状態の悪い老人を少しでも減らすことが本当に恵まれた長寿社会だと思います。

さて、この現状にロータリーはどのように参画すべきでしょうか。一概に老人と云っても年を重ねるだけでは老人とは言えません。自立した日常生活が送れなくなってくるのと、これが老人の始まりです。

そこでロータリーが力を注いでいる青少年プログラムに加えて、老人に対する取り組みも最重要課題になるのではないのでしょうか。金銭的な援助や介護施設などを増やすだ

けでは決して解決にはなりません。これまでのロータリーの社会奉仕や職業奉仕の理念だけでは二一世紀の現状に合致しなくなっているように思えます。もちろん、ロータリークラブ自体にもこのような取り組みが課題として見えているのが現実です。

認知症、運動障害、摂食障害、排尿・排便障害、さらに知的障害と考えられる人たちに、ロータリーはどのように接するか、また、そうした人たちが私たちと同じ日常生活を送れるような具体的な奉仕を考えるべきではないでしょうか。運動療法や音楽療法など新しい視点に立ち、老人と言われる人の心の動きを少しでも高めようとする方法が成功しているのを見かけます。老人対策として、一人ひとりの心の中に入り込み、その人の心の動きを引き出し、その人の持つ得意なことを探し出して働きかけることが必要でしょう。ロータリーとしてこれらの問題を直視し、これからの社会奉仕、職業奉仕の活動に加えていただきたいと実感しています。

私自身もロータリアンとして三九年、例会皆出席、いつの間にかクラブで最年長（八二歳）になりました。今も現役として仕事を続け、不自由のない生活を送ることができのち、ロータリーという心の支えがあったから、と感謝の毎日です。